

「人々の生活を支える地域連携」

シンポジウム「住民の視点に立った地域づくり」

コーディネーター 佐々木隆一郎（飯田保健福祉事務所）

伊藤 有子（松本保健福祉事務所）

第5回信州公衆衛生学会総会に当って西澤喜代子会長が掲げたメインテーマ「人々の生活を支える地域連携」におけるシンポジウム「住民の視点に立った地域づくり」のコーディネーターをお引き受けするに当って、「ノーマライゼーションを普通に」を、コーディネーターとしての基本的な立場としました。

日本は、病などのためハンディキャップなどを持って人生を過ごしてみえる方々に対して、決して優しい国ではありません。我々には、こうした方々を、地域社会から隔離し、遠ざけてきた長い歴史があります。残念ながら、今もなお、その歴史の後遺症が地域社会の中に残されています。また、こうした方々に対する支援システムも開発途上です。

今回のシンポジウムは、まだ著についたばかりの「ノーマライゼーション」を、県内で医療・福祉・生活者など種々のお立場から原動力として積極的に推進してみえる四人の方々を、シンポジストとしてお迎えし、その先進的な取組みなどから、現状を確認すると共に、今後の方向性について考える機会にできたらと考えています。

小林美佐子氏からは 須高地域で取り組んでみえる地域内完結型医療福祉を目指した地域連携ネットワークづくりの実例を報告していただきます。

原寛実氏からは、急性期を乗り越えた方々が、より良い社会復帰を目指して退院後も継続的に行う在宅訪問リハビリテーションの経験からのご報告をいただきます。

五味富士氏からは、松本市で主任児童委員として、地域の子ども達や母さん達が元気に安心して暮らせるように取り組んでみえる活動の一端を紹介していただきます。

戸田充文氏からは、心に病を持った方々が、地域で普通に生活してゆくために課題になっている点を中心に話をいただきます。

ハンディキャップの有無にかかわらず地域で生活する全ての方々が、普通に安心して生活できるようになるには、医療や福祉の基盤整備に加えて、少し時間がかかっても、二つのことが大切だと考えています。一つは、地域で生活する全ての人々が普通の生活が出来るような「まちづくり」を行うことです。もう一つは、我々自身の心に、「地域の人と一緒に生きる」という気持ちを浸透させることです。この二つが、当たり前前の地域社会になった時、「ノーマライゼーション」は、普通になるのだと考えています。